

今月は、「食べる」という行為に焦点を当てて、子どもの生を見直すことを試みた。

子どもにとって、口は、世界に対して開かれた窓である。一つは、言葉さながらの意味において、そして、いま一つは、譬喩的な意味においても、彼らは、口を通じて世界と出会うのだから。

赤ん坊が、唇に触れるものに吸いつくという能力によって自身の生存を確保し、唇の知力を駆使して外界を識別することは、周知のとおりである。しかも、彼らは、吸うことの快感を再現しようとして、余念なく唇の遊びをくり返し続ける。こうして、認識と遊びという、人の生き方を支える二つの糸が、唇を通じて形成されていく姿を見ると、子どもとは、まさしく、「口の文化」を生きる存在なのだと思えてくる。そのゆえに、子どもの世界の特性を、「食べる」という相においてとらえることは、意味深く、ま

た、興味深いことであらう。

確かに、子どもたちは、食欲なまでの食欲の持ち主である。外界は、彼らの食欲のままに次々と呑みこまれ、その内部に同化される。その上に、こうして「食べる」存在である子どもたちは、一方では「食べられる」ことを欲している。彼らは、しばしば、傍にいる大人に「も」を差し出すことがある。それは、子どもの作った小さな細工だったり、皿に盛られた泥団子だったりするが、それらを、大人たちが受けとり、ポケットに収め、或いは、口に運ぶふりをするとき、彼らの顔は、満ち足りた安堵で一杯になる。彼らは、それら小さなものを己れの分身として、愛する他者の前に差し出しているのだ。

「呑みこみ」「食べて」同化する子どもたちは、同時に、「食べられる」ことにより、他者との一体化を願う存在であると言えよう。

(本田和子)

幼児の教育 第七十九巻 第六号

六月号 © 定価二五〇円

昭和五十五年五月二十五日 印刷
昭和五十五年六月一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行人

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ二二

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発行所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館にお願いいたします